Discussion Paper No.294

マルクス経済学の理論体系の論理的出発点と論理的帰結について

吉林財経大学
魏 旭

一橋大学 大学院
高晨曦:訳

December 2017

INSTITUTE OF ECONOMIC RESEARCH
Chuo University
Tokyo, Japan

マルクス経済学の理論体系の論理的出発点と論理的帰結について*

On the logical starting point and its consequence in the theoretical framework of Marxian economics

魏 旭（吉林財経大学）

Wei Xu (Jilin University of Finance and Economics)

訳 高晨曦（一橋大学（院））

Gao Chenxi (Hitotsubashi University)

一、問題の提起

論理的出発点というのは、研究対象に呼応し、理論体系の各範疇の内的関係や理論全体の構造に関わるものであり、科学的な理論体系を構築するうえでの前提である。だから、理論の論理的出発点を理解することが、理論そのものを理解する予備作業となる。論理的な出発点となるには、それが「終結点として現われるかぎりで、出発点として現われる」①〔12〕154〔要綱1〕215ものでなければならない、従って、科学的な理論体系の論理的出発点の範疇とは必然的に、その研究対象の領域におけるすべての矛盾の芽までも含む、その研究対象の領域での最も一般的な抽象的規定であることが必要なのである。それとは対照的に、論理的帰結の範疇はあくまでも抽象から具体までの発展段階の結果であり、豊富な規定や関係に満ちている総体に過ぎない。筆者は、論理的出発点と論理的帰結を結合することなしに、構造的に全体的にマルクスの理論体系の論理的出発点を理解することはできないと考える。マルクス経済学の理論的体系（本文において、ここでは、『批判』と『資本論』の理論両方が含まれるとする）の論理的出発点がもつこの特殊な地位ゆえに、各国の研究者たちのあいだに、体系的な研究と議論を呼び起こした②。議論の当事者たちは、商品こそがマルクス経済学の論理的

*魏旭（1971―），男性、吉林農安出身、経済学博士、吉林財経大学マルクス主義経済学研究センター教授、主にマルクス主義経済学と近代経済学との比較研究を従事している。
メールアドレス：weixujlcd@163.com；携帯番号：13504337847；
通信アドレス：吉林省长春市净月大街 3699 号《当代经济研究》编辑部。

①産業資本の循環を考察する際、マルクスは出発点と帰結との間の弁証法的関係を説明した。《马克思恩格斯全集》第 30 巻，北京：人民出版社，1995 年，第 154 页を参照

② 周知のように、『経済学批判序説』（以下は『序説』）で政治経済学の方法論を展開する際、マルクスはそ

出発点であるという点では合意したものの、その商品の内的規定に関する理解では意見が分かれている。商品の性質にかんする論争当事者の認識は、概ねに以下の三つの見解に分類できよう。

第一の見解では、この商品とは「資本主義での商品」である。『社会主義での商品と貨幣の問題に関する論争と分析：総論』の中で骆耕漠はこの見解を打ち出した。ただし、彼によれば、マルクスは「その科学的抽象法を応用する際、（最初は）一時的に資本商品における資本関係①を捨象し、（ついで）単純商品という「原初的な」関係に分析範囲を限定した」[1]②に過ぎない。马卫刚も、「商品は資本制経済の細胞であって、（商品という範疇は）必然的に資本主義経済システムでの商品を指すものであり、資本主義社会のもっとも単純な、普遍的な、直接的な存在である、と考える。さもなければ、以下のような論理的矛盾が現れざるを得ないだろう。すなわち、ある有機体の最も基本的な構造はまるでこの有機体の外部にあるものであるという矛盾である」。そう述べた马卫刚は、「（マルクスにおける商品の範疇を）単純な商品生産（での商品）あるいは純粋的な商品一般と同等視してはならない」と主張する[2]③。李绪蔼は、マルクスの分析対象である商品を前資本主義社会あるいは「純粋商品経済」での商品と見る見解は、資本主義社会というマルクスの分析対象を逸脱するものであり、マルクスの基本原則、つまり「いつでもどこでも主体を把握しなければならない」という原則に背くものである、と主張する[3]。罗雄飞教授もこの意見を支持する。彼は、資本主義社会という有機体での商品生産こそマルクス経済学の出発点であると主張し、マルクスの思惟に従えば、たとえ「抽象」法を応用するとしても特定の研究対象から離れてはならない、「一般的規定」は必ずもっとも発展された具体のなかで発見されなければならない、だから、歴史的な反省が見られるものの、マルクスの真の論理的出発点は資本主義生産にあるに違いない、と主張する[4]。

第二の見解は、マルクスの商品を「商品一般＝単純商品」と見る。その代表者の一人である卫兴华教授は、『資本論』の冒頭では単純商品生産と単純商品流通が検討されていると見て、その上、単純商品と価値との関係から得られる一般的原理や規律は資本主義的商品生産を含めすべての商品生産に適用できる、つまり、「単純商品＝商品一般」であると主張し、「単純商品＝商品一般」を研究することと、資本主義経済の細胞である資本主義での商品を研究

の経済学批判の体系構築の計画から始めている。しかし、五編であろうと、六冊であろうと、『資本論』の三巻であろうと、マルクスは経済学批判の体系を構築する作業中つねに自己の計画を修正している。それゆえ、『序説』や『資本論』で展開された方法だけに依拠してマルクスの経済学体系の構築やその論理的出発点を理解するのは不十分である。弁証法的方法に従い、われわれは、『序説』と『資本論』においてマルクスが用いた方法を結合し、その上で考えなければならない。

① ここでの「資本関係」は、資本主義生産様式での生産関係と理解してもよい。——訳者

② 括弧内は訳者。

③ 括弧内は訳者。

することは同じであり、両立可能である、と考える[5]。陈俊明教授も単純商品こそ『資本論』冒頭部分の研究対象であって、それは一時的に資本関係を捨象した商品であり、資本家階級の富の細胞でもあると、卫兴华教授に賛同の意を表している[6]。 同じ陣営の丁堡骏と王金秋の両氏も、資本関係を捨象した商品一般と資本主義的商品の予備段階としての単純商品は、両方とも『資本論』の論理的出発点としての「商品」になりうる、商品一般は単純商品生産にも適用できるのだから、商品一般と単純商品の生産に本質的な違いを認めるべきでないと主張する[7]。

第三の見解はマルクス経済学の論理的出発点としての「商品」を商品一般とみなす考えである。例えば、「(『資本論』の論理的出発点としての「商品」）は前資本主義社会での商品でも、資本主義での商品でもない、それはすべての社会的形態に共通する商品一般にほかならない」[8]という胡培兆教授の見解と、抽象的範疇である『資本論』の論理的出発点としての「商品」と「価値」は前資本主義社会での単純商品生産にも、資本主義社会での発達した商品生産にも通用されるべきであって、人類社会の商品生産の歴史的出発点とも資本主義社会の商品生産の歴史的出発点とも一致すべき普遍性のある概念であるとする李建平教授の見解[9]はそうである。

見解はさまざまだが、こうしたマルクス経済学の論理的出発点にかんする議論は、マルクス経済学の論理的体系と構造を認識するのに有益な視点をわれわれに提示してくれている。しかし、どの主張であれ、『資本論』の論理的出発点と『資本論』の論理的出発点の「商品」について、その理解は不十分だと言わざるを得ない。これまでの議論は、『資本論』の論理的出発点としての「商品」をある特殊な性格を有する商品として、誤った形で捉えているか、あるいは出発点と帰結の弁証的統一的関係ではなく、出発点を唯一の対象としてマルクスの経済学体系の論理的出発点を考えようとしているか、どちらかである。これらの過ちはすべて、マルクスの経済学研究の方法論に対する誤解、従ってマルクスの経済学体系の構築の論理に対する誤解に起因する。そのため、本稿は、政治経済学の方法論に対するマルクスの記述をもとに、マルクスの経済学理論体系の論理的出発点と論理的帰結を体系的に解明することとしたい。

二、マルクスの政治経済学的方法論に対する再認識

マルクスの経済学体系の論理的出発点は、唯物弁証法の総原則に基づき、理論体系の論理的出発点と論理的帰結の弁証的統一的な関係を念頭に、長期的な模索を経て、最終的には「商品」として確定されている。各国の学者たちのマルクスの経済学体系の論理的出発点である商品の性格に関する誤解は、やはりマルクスの政治経済学的方法論に対する誤読に起因する。ならば、マルクスの経済学体系の論理的出発点を正確に理解するために、われわれは

何よりもまず、マルクスの経済学的方法論を正確に把握しなければならない。

1. 研究の方法と叙述の方法との弁証的関係

マルクスの経済学体系、その全体的思惟の論理的科学性は、弁証法の論理の科学的抽象方法の運用において集中的に表れる。この科学性はマルクスが経済学理論を構築する研究過程だけではなく、マルクスが彼の学説体系全体を説明（叙述）する過程にも、一貫して認められる。それゆえ、研究の方法と叙述の方法、その両者は結局本質的に科学的抽象の結果に現れることになる。その意味で、マルクスは『資本論』第一巻第二版の序言で以下のように強調したのである、すなわち、「もちろん、叙述の仕方は、形式上、研究の仕方とは区別されなければならない。研究は、素材を細部にわたってわがものとし、素材のいろいろな発展形態を分析し、これらの発展形態の内的な紐帯を探りださなければならない。この仕事をすっかりすませてから、はじめて現実の運動をそれに応じて叙述することができるのである」[10]21,22[23巻]22。そして「そのうえ、経済的諸形態の分析では、顕微鏡も化学試薬も役にはたたない。抽象力がこの両方の代わりをしなければならない」[10]8[23巻]8。しかし、マルクスが指摘したこの二つの方法あるいは二つのプロセス（過程）を対立させる誤読はしばしば学界で散見される。程恩富教授が指摘したように、この人たちは、マルクスのこの指摘を理解するとき、『要綱 *Grundrisse*』におけるマルクスが政治経済学の体系を構築するときに用いた二つの経路と、『資本論』第二版の序言でマルクスが言及した研究の方法と叙述の方法との関係を有機的に結合していない。だから「(マルクスにおいて) 研究の方法は具体から抽象への昇華であり、それに対し、叙述の方法は抽象から再び具象への昇華である」[11]という誤解が生じたのだろう。この程恩富教授が批判した見解は、同じ研究プロセスにおける科学的抽象方法の有機的構成としての二つの方法を対立させている。しかし、マルクスの研究の方法と叙述の方法は、互いに独立的かつ無関係な段階や方式ではなく、同じ研究プロセスで相関的に用いられた手法であって、この両者は本質的に（同じ）科学的抽象方法に帰着する。それゆえ、ある経済学体系の構築が科学的であるか否かを判断する際、判断の基準は、その叙述の方法が「具体から抽象への昇華」か「抽象から再び具象への昇華」のどちらにあるかではなく、それが社会経済における矛盾の本質を提示しているかどうかによるべきである。マルクスは『要綱 *Grundrisse*』で経済学研究の「二つの経路」をあれほど詳細に検討したのはまさにそのためであろう。マルクス曰く：「実在的なものと具体的なものから、つまり現実的な前提から、したがってたとえば経済学では、社会的生産行為全体の基礎であり主体である人口から始めることが、正しいことであるように見える。しかしこれは、もっとたちいって考察してみると、まちがっていることがわかる。……もし私が人口から始めるとしても、それは全体についての混沌とした表象であるにすぎず、もっとたちいった規定をあたえることによ

って、私は分析的に、だんだんとより単純な諸概念を見いだすようになろう。表象された具体的なものから、だんだんとより希薄な抽象的なものに進んでいって、ついには、もっとも単純な諸規定に到達してしまうであろう」[10]41[要綱]49。ここでは、マルクスは現実あるいは現象の具体（具象）は、その現実あるいは現象の出発点であるにも関わらず、それが思惟の過程では原因ではなく、結果として現象すると強調している。マルクスが研究の過程を否定したわけではないことは明らかである。むしろ、その逆で、彼は完全な意味での抽象的思惟に二つのプロセス、すなわち完全な表象から抽象的規定（＝「もっとも単純な規定」）への昇華、そしてそこ（もっとも単純な抽象的規定）から豊富な規定と関係が満ちた総体に再度上昇するという二つの過程が必要であることを強調している。これはまさに『資本論』の序言においてマルクスが指摘した研究の方法と叙述の方法との弁証的関係とぴったり合致する。第一の経路はあくまでも科学体系の礎石をなすものであり、体系そのものではない。ある科学的理論体系の構築は必ずある範疇の演繹的論理系列として現象しなくてはならない[13]。ここで指摘すべきは、抽象から具象への昇華が、現実の具象を離れてはならないということである。なぜなら、この昇華は具象自体の形成過程ではないからである。つまり、あるものの内的本質あるいはその規律を認識として把握するとき、人は「具体から抽象へ」と「抽象から具体へ」という方法を分断し独立させることではなく、弁証的統一的に運用しなければならないということである。資本主義生産様式の規律を明らかにすることがマルクスの経済学理論体系の任務であるから、もっとも豊富な現実の全体から出発して、それを抽象化してもっとも単純な規定を獲得し、そこから出発して体系全体を構築し、最後にまた豊富な規定と関係を満ちた思惟の総体に立ち戻る（この一連の過程も当然であろう）。この過程では、研究の論理体系は資本主義生産様式という現実的かつ支配的な現実主体を一刻も離れてはならない。つまり、この論理的出発点は、各範疇が歴史で決定作用を発揮する審級によってではなく、「近代ブルジョア社会の内部でのそれら諸関係の編制」[12]49〔要綱１〕61によって決定されている。したがって、ここでマルクスの体系の論理的出発点になりうる唯一の対象は、資本制経済の細胞形態である資本の最も一般的な前提――抽象的商品一般にほかならない。具体から抽象への思惟のこの結果はただ資本主義生産様式のもっとも単純な規定的属性だけではなく、思惟の全体的過程で、体系全体を体系の論理的帰結――世界市場の資本としての生産物に回帰させるものでもある。無論、体系全体からすれば、この論理的演繹は仲介なしには実現できないだろう。

2. 論理的方式と歴史的方式との弁証的関係

マルクスの政治経済学方法論におけるもう一つ重要な側面は、その論理的方式と歴史的

方式との弁証的関係[①]である。この側面に対する理解は、マルクスの経済学体系の論理的出発点である商品の性格を正しく理解するための前提だろう。しかし、学界では長期に渡って、論理的方式と歴史的方式および理論体系の構築におけるこの二種の方式の弁証的関係に対する理解は様々であり、つねに論争や誤解が引き起こされてきた。大ざっぱに言えば、この弁証的関係に対する理解は三つに分かれている。第一の見解は、ローゼンターリ（M.M. Rozentali）を代表とし、国内の大半の学者が支持している、マルクスの経済学体系の構築の論理は紛れもなく資本主義の歴史的発展の反映だという主張である[14]。第二の見解では、「論理的審級と歴史的審級との合致は政治経済学の方法論の原則とはいえ、『資本論』においてでは、その方法をマルクスが徹底的に使っていない」[15]という宇野派の見解が典型的である。沈佩林を代表とする第三の見解は、「政治経済学の方法論的原則である論理的審級と歴史的審級の一致を、マルクスが彼の理論体系に一貫させていない」[15]とする立場である。この問題に対する学界の誤解は、おそらく『カール・マルクスの「経済学批判」』でマルクスの経済学批判の方法論について論じたエンゲルスの記述の誤読に起因する。エンゲルスは、「この歴史の始まるところから、同じく思考の行程も始まらなければならない。そしてそれ以後の進行は、抽象的な、そして理論的に一貫した形式における、歴史的経過の映像にほかならないであろう。つまりそれは修正された映像であるが、しかし修正といっても、われわれはそれぞれの契機を、それが十分に成熟し典型的形態をもつにいたった発展時点で考察しうるのであるから、現実の歴史的経過そのものがあたえるところの諸法則にしたがって修正されているのである」[16]532[13巻]477と指摘した。このエンゲルスの指摘を援用する論者たちは、マルクスの経済学理論体系の論理的出発点である商品は、歴史的にかつて存在した単純商品であると思い込んでいる。だが、ここでエンゲルスが強調したのは、まさに思考のプロセス、すなわち全体の思惟のプロセスの現実的出発点である具象（具体的現象）にほかならない。この具象は、一連の抽象的方法によって一般化、単純化され、そしてそこから初めて全体の思惟プロセスの次の段階の叙述の出発点、つまり論理的出発点が始まるのである。だからこそ、エンゲルスは「思想展開の唯一の正しい形式」が、この方法は「唯物論的根本見解にほとんど劣らない成果」[16]532[13巻]477と強調したわけである。無論、その理論体系においてマルクスは、支配的な資本制生産様式という主体をめぐって、資本主義経済は如何にその細胞形態から、機械的大工業を代表とする発達した資本制生産様式に発展したのか、そしてその発展の規則とは何か、という考察を行なっていた。この考察によって、彼は世界市場の体系に基づく資本制生産関係と交換関係の本質とその規則をわれわれに提示してくれた。更にもう一言

---

① 論理的方式と歴史的方式は、しばしば学界では「論理的審級」と「歴史的審級」と呼ばれている。それと対応して、両者の間の弁証的関係も「論理的審級と歴史的審級との合致」あるいは「論理的方式と歴史的方式との統一」と呼ばれている。

を付け加えれば、支配的な資本制生産様式の前に、論理的方法と歴史的方法を統一する必要があり、それが「思想展開の唯一の正しい形式」であるわけだが、だからと言って、それがマルクスの経済学体系の論理的出発点である商品を資本主義での商品と誤認する根拠にはならないということである。この点について、マルクスは既に『要綱 *Grundrisse*』で労働と貨幣の範疇を例に挙げて詳しく説明していた。だから、経済規則に関する研究と理論体系の構築には、超歴史的先験的な論理など存在しないのであり、その代わりに、事後的に歴史の発展に対する論理的分析、本質の抽象、規則の総結がマルクスの原則であり、別に論理的審級と歴史的審級の厳格な一致を要求しているわけではない。

三、マルクスの経済学体系の現実的出発点と論理的出発点

経済学体系を構築するさいの現実的出発点（具体から抽象に上昇する出発点）と論理的出発点（抽象から具象へ）を考えるマルクスは、まず経済学が歩むべき道を考察し、十七世紀の経済学者たちの欠陥を指摘した。十七世紀の経済学者たちは生々しい全体から出発し、最後には抽象的な一般的関係にたどり着いた。この「完全な表象を蒸発し抽象的規定を得る」方法はあくまでも科学研究の全プロセスの前半にすぎず、単独で完全な科学体系にはなれない。なぜなら、「具体的なものは、それが多数の諸規定の総括であり、したがって多様なものの統一であるからこそ、具体的である。それゆえ具体的なものは、それが現実の出発点であり、したがってまた直観と表象との出発点であるにもかかわらず、思考においては総括の過程として、結果として現われるのであって、出発点としては現われない」[12]42[要綱]50からである。つまり、正しい道とは、表象における具象から抽象的規定を導き出し、またこの抽象的規定から順次具体的な範疇（思惟の具体あるいは全体）に上昇する道である。この具体（全体）はもはや全体に関する混沌とした表象ではなく、さまざまな規定や関係が満ちている全体（思惟の具体）であって、論理的演繹的帰結、すなわち叙述の帰結である。ゆえに、思惟過程の現実的出発点になりうるのは現実の具象のみである。しかし、どんな具象でも思惟過程の現実的出発点になれるわけではない。そうなるためには、この具象はある特殊な規定を満たさなければならない。マルクスの「労働」の範疇に対する考察を例に取ろう。マルクスは、労働という範疇は抽象的範疇のそれであれ、具象としての具体（的範疇）のそれであれ、共に古い概念であるが、経済学的にこの範疇を単純に把握するのは現代的である。つまり、「すべての社会諸形態に妥当する太古からの関連を表現するもっとも単純な抽象は、それにもかかわらず、じつはこの抽象の点では、もっとも近代的な社会の範疇としてこそ実際上真実のものとなって現われる」[12]45,46[要綱]57。なぜなら、もっとも一般的な抽象はいつももっとも豊富な具体が発展してくる場所、つまりもっとも複雑な形態を備えている現代社会においてのみ、現象しうる。だから論理的分析の現実的出発点、あるいは全体思惟過程の中で具象

から抽象する際の出発点は、歴史上もっとも発達し、かつ複雑な社会における具象にほかならない。これに対して、マルクスは「ブルジョア社会は、もっとも発展した、もっとも多様な、歴史的生産組織である。それゆえ、それの諸関係を表現する諸範疇は、それの編制の理解は、同時に、すべての滅亡した社会諸形態の編制と生産諸関係との洞察を可能にする」[12]46[要綱]57と強調している。つまり、「人間の解剖は、猿の解剖のための一つの鍵である。反対に、より低級な動物種類にあるより高級なものへの予兆は、このより高級なもの自体がすでに知られているばあいにだけ、理解することができる。こうしてブルジョア経済は、古代その他の経済への鍵を提供する」[12]47[要綱]58。この規定に合致するのは、マルクスの経済学体系においては資本の論理が支配的である世界市場的資本主義経済にほかならないだろう。それに対して、マルクスは「しかし、対外貿易ははじめて価値としてのその真の性質を発展させる。というのは、対外貿易はそのなかに含まれている労働を種々な使用価値の無限の列に表わされる社会的労働として発展させ、そして実際に抽象的な富に意味を与えるからである。……しかし、ただ対外貿易だけが、市場の世界市場への発展だけが、貨幣を世界貨幣に発展させ、抽象的労働を社会的労働に発展させるのである。抽象的な富、価値、貨幣――したがってまた抽象的労働は、具体的労働がいろいろな労働様式の世界市場を包括する総体に発展するのと同じ度合いで発展する。資本主義的生産は、価値に、すなわち生産物に含まれている労働の社会的労働としての発展に、もとづいている。しかし、これはただ対外貿易と世界市場という基礎の上でのみのことである。だから、これは資本主義的生産の前提でもあれば結果でもあるのである」[17]277,278[剰余価値学説史 3]332～3と指摘する。これはつまり、資本制生産様式が支配的である世界市場においてのみ、商品交換は完全な意味で普遍化され、資本の間、資本と労働、国家と国家との関係の本質が明らかにされるということを意味する。そこにおいてのみ、価値増殖の内的衝動と生産力発展の矛盾が完全に展開され、したがって資本蓄積の限界、資本の歴史的傾向または資本主義の必然的死滅の法則が完全に明らかになる。しかも、資本の範疇そのものの性格から見ると、「資本は、一方ではたえず、より多くの剰余労働をつくりだそうとする傾向をもつとともに、それらの剰余労働を補完する、より多くの交換点をつくりだそうとする傾向をもつ。すなわち、ここでの絶対的剰余価値ないし剰余労働の立場からすれば、それ自身への補完としてより多くの剰余労働を呼び起こそうとする傾向、つまるところ、資本にもとづく生産あるいは資本に照応する生産様式を普及させようとする傾向をもつのである。世界市場をつくりだそうとする傾向は、直接に、資本そのものの概念のうちに与えられている」[12]388[要綱 2]15。事実、商品交換という原初的な範疇は現実ではまず原始的共同体の間における余剰の交換として現象し、原始的共同体の内部から発生するのではない。その後の歴史的発展も、資本は常に「自分の姿に似せて一つの世界をつくりだす」

《共産党宣言》[17]278[4 巻]480、すなわち、資本が支配する世界市場をつくりだすのである。だから、マルクスの経済学体系の現実的具体から抽象する際の出発点になりうるのは、世界市場体系での資本主義的商品にほかならない。それに対して、マルクスの経済学体系の論理的出発点、つまり現実的具体から抽象した商品一般も、世界市場体系での商品一般に違いない。この商品、すなわちもっとも一般的な抽象、もっとも単純な範疇としての商品は、あらゆる時代、複数のものが共有し、あらゆるものが共有するような①特性を有するので、自然に理論体系の構築の論理的出発点になるわけである。だが、強調しなければならないのは、このもっとも一般的な商品は、それが最も抽象的であるがゆえにあらゆる時代に適応されるが、「この抽象という規定性の点からいえば、やはりまぎれもなく歴史的諸関係の産物であるということ、そしてその完全妥当性をこの諸関係にたいしてだけ、この諸関係の内部でだけもつということである」[12]46[要綱 1]57。

四、マルクスの経済学体系の論理的帰結

周知のように、マルクスは彼の経済学体系を構築するにあたり、何度も自分の計画を調整し、最初の「五篇」から「六冊」、さらに四巻本の『資本論』へと計画の変更を行っている。②それゆえ、その全体的な構成から見ると、マルクスはやはり最終的には「五篇」と「六冊」の計画を放棄したと思われる③。しかし、この放棄にあたり「五篇」と「六冊」の計画に盛り込まれていた「世界市場」は、『資本論』の計画から除外されたのだろうか。答えは否である。放棄されるどころか、むしろマルクスの理論体系の頂点に位置づけられている。トニー・スミス（Anthony David Hawthorn ’Tony’ Smith）は、マルクスは自分の理論を世界市場の範疇の上に構築し、資本主義の経済規則に対する自分の認識を説くにあたって、常に世界市場を意識していると主張している[18]。しかも、それは「『資本論』のどの理論的次元においても認められる事実である。したがって、この既成の全体の隠れた本質的規定を展開する必然

---

① 重複していると見えるが、原文もそのままである（訳者）。

② 事実、1861-1863 年草稿を書くとき、マルクスは既に『経済学批判』の計画を放棄していた。それは 1862 年クーゲルマンへの手紙によって証明される：「第二部はいまやっとできあがったところです。つまり印刷するために浄書し最後の仕上げをするところまできています。ほぼ３０印刷ボーゲンになるでしょう。これは第一分冊の続きですが、独立して『資本』という表題で刊行され、「経済学批判」というのはたんなる副題となります。事実それは第一部第三章をなす予定のもの、つまり「資本一般」をふくむだけです。ですから諸資本の競争や信用制度はそこにはふくまれていません。イギリス人が「経済学原理」と呼ぶものがこの巻にふくまれます。これは（第一の部分とあわせて）核心的部分で、これに続くものの展開は（たとえば社会のさまざまな経済構造にたいするさまざまな国家形態の関係などをのぞけば）ほかの者でもすでにあたえられたものを土台にすれば容易になしとげられるでしょう……」[30 巻] 518 注意すべきことは、ここの「第二部分」をエンゲルスが『資本論』第一巻の初稿に該当すると宣言したことである。詳細は、马克思恩格斯.《资本论》书信集[M].北京：人民出版社，1975:170.を参照。

③ 「六冊計画」に関して、マルクスは 1859 年の『経済学批判』で既にこう強調していた。「はじめの二章がこの分冊の内容をなしている。材料全部は個別論文のかたちで私の手もとにあるが、それらは長い間隔をおいたいくつかの時期に、自分のために問題を解明する目的で書きとめられたもので、印刷するために書かれたものではない。そしてそれらを前述の計画にしたがって関連のあるものに仕上げることは、外部的な諸事情しだいであろう。」（『経済学批判』序言）

性は、「世界市場」という範疇の出現に対して理論的根拠を提供した」[18]。「資本の増価と減価、資本の遊離と拘束」を考察するにあたり、マルクスはとくに「われわれがこの章で研究する諸現象は、その十分な展開のためには、信用制度と世界市場での競争とを前提するのであって、この世界市場こそは一般に資本主義的生産様式の基礎をなしその生活環境をなしているのである。しかし、これらの資本主義的生産のいっそう具体的な諸形態を包括的に叙述するということは、資本の一般的な性質を把握してからできることである」[19]125, 126[25巻]140と主張した。たしかにマルクスは「このような諸形態の叙述はこの著作の計画外のことであって、もし続巻ができればそれに属することである」[19]126[25巻]140と述べているが、それは世界市場の範疇においてのみ、資本制生産様式の根本的矛盾が語られ、資本主義経済の規則が完全に掲示されうるからである。マルクスからすれば、資本制生産の目的と決定的な動機は、やはり資本の増殖であり、可能な限り多くの剰余価値を取得することである。増殖を実現し、競争の中で勝ち残るために、資本は絶えず蓄積に励み、新たな技術を利用し、新たな組織形態に再投資しなければならないのであって、これは動学的なサイクルを構成している。つまり、価値を増殖するため、資本は蓄積しなければならない。資本の蓄積には、より多くの剰余価値を取得しなければならない。しかし、資本の蓄積に伴い、資本の有機的構成が徐々に高度化し、同等数の資本が動かせる労働は相対的に、場合によって絶対的に減少し、したがって資本の利潤率には下降の傾向が見られるようになる。これは資本の蓄積における矛盾であって、それが生産現場での資本と労働の双方にとって過剰をもたらす。現場あるいは国内での過剰が発生した際、資本はやむを得ず生産と売買の地域的限界を突破し、グローバル市場に進出しなければならない。この機械的大工業に特徴的な特殊な資本制生産様式の内的法則は、つぎのような事態を引き起こす。すなわち、「資本は一方では、交易すなわち交換のあらゆる場所的制限を取り払って、地球全体を自己の市場として獲得しようと努めないではおられず、他方では、時間によって空間を絶滅しようと、すなわちある場所から他の場所への移動に要する時間を最小限に引き下げようと努める。資本が発展すればするほど、したがって、資本が流通する市場が、資本の流通の空間的な軌道となる市場が拡大すればするほど、同時に資本は、市場をますます大規模に空間的に拡大しようと、また、空間を時間によってますます大規模に消滅させようと努めるのである」[12]538[要綱2]216。そして、資本が一国を支配するまで発展したとき、生産と消費、供給と需要との矛盾が徐々に激化し、国内の狭い市場ではもはや資本の拡張欲を填めるには足りずに、国民国家の境界を突破するために、「ブルジョアジーは全地球上を駆けまわる。彼らは、どこにでも腰をおろし、どこにでも住みつき、どこにでも結びつきをつくらなければなら」[20]469[4巻]479ず、過剰資本や過剰商品のために活路を探し、世界システムとしての資本主義までに至る。世界市場では、「新しい産業を導入す

ることがあらゆる文明国にとって死活の問題となる。それは、もはや国内産の原料ではなく、同時にあらゆる大陸で消費される。国産品で充足されていた昔の欲望に代わって、はるかに遠い国々や風土の産物でなければ満たされない新しい欲望が現われてくる。昔の地方的、また国民的な自給自足や閉鎖に代わって、諸国民の全面的な交通、その全面的な依存関係が現われてくる。また、精神的な生産の部面でも、物質的な生産の場合と同じことが起こる」[20]469[4巻]479。こうして、新航路と新大陸の開発を通じて、新興資本家階級は新たな天地を開拓した。だが、資本の蓄積に伴い、資本制生産様式が支配的となった世界システムの形成によって、世界市場の資本の生産物としての商品に内包されている資本主義の経済的矛盾も徹底的に展開された。資本の蓄積と個別資本の増殖のために機能した資本主義的競争は、最終的には生産力の発展を資本の自己増殖の手段にではなく、資本の増殖を廃棄するための手段となって立ち現れる。これについて、マルクスはつぎのように指摘している。「すでに現存する物質的な、すでにつくりだされている、固定資本の形態で存在する生産力、たとえば科学力、人口等々、要するに富の一切の条件は、また富の再生産のための最大の諸条件、すなわち社会的な個人の豊かな発展は、――これらのものは、資本そのものによって資本の歴史的発展のなかでもたらされた生産諸力の発展がある一定の点にまで達すると、資本の自己増殖を措定するのではなく、それを止揚する、ということである。生産諸力の発展が、ある一点を超えると、資本にとって制限となり、したがって、資本関係が労働の生産諸力の発展にとっての制限となるのである。この点に達すると、資本、すなわち賃労働は、社会的富と生産諸力との発展にたいして、同業組合制度、農奴制、奴隷制がはいったのと同じ関係にはいり、そして桎梏として必然的に脱ぎ捨てられる」[21]［要綱2］558。これはつまり、資本制生産様式が支配的となった世界市場の発展は同時に資本主義の矛盾と危機が深刻化する過程であるということを意味する。空間的に見れば、マルクスのいう「ある一点を超える」という「点」は、まさにいわゆる世界市場ではなかろうか[22]。世界市場の開拓は、ある程度までは資本主義の蓄積に伴う矛盾を先延ばししてはいるが、この矛盾はつねに資本主義の内部で周期的に爆発する。なぜなら、世界市場においてでも、「一国全体の生産は、この国の直接的な欲望によって測られているのでもなければ、生産のさまざまな部分の、生産の利用のために必要だというような配分によって測られているのでもない。したがって、再生産過程は、同じ一国での相互に対応しあっている諸等価物の製造に、世界市場の吸収力と拡大とに依存する。このことによって、不照応の可能性の増大が与えられており、そこから諸恐慌の可能性の増大が与えられている」[23]［草稿集６］564～5からである。それと同時に、すべての国家、すべての階級はこの資本が支配する世界システムのなかに巻き込まれる。それにつれて、資本主義全体の内部矛盾が完全に暴露される。マルクスが述べた通り、「全世界的な状態での搾取を普遍的友愛と

いう名称でよぶようなことは、これこそブルジョアジーの胸中でなければ発生しえなかった考えだ。自由貿易が一国の内部に発生させるいっさいの破壊的現象は、もっと巨大な規模で全世界の市場に再現する」[20]457[4 巻]470からである。だから、理論的抽象から具象への上昇であろうとも、資本主義矛盾を反映する蓄積、演繹過程であろうとも、マルクスの経済学体系の論理的帰結は資本の生産物としての世界市場での商品でなければならない。ただ、この商品は現実の具体的な商品ではなく、多数な規定を被り思惟の全体としての商品であって、この商品は十分に発展された豊富な資本主義の矛盾、つまり資本蓄積の歴史的趨勢における生産の社会性と資本主義の私的所有との矛盾を内包し、資本主義の終焉と共産主義社会の到来が必然的であることを予示するものである。

五、簡単な結論

総じて言えば、経済学の理論体系を構築するにあたって、マルクスはシステム論的特徴を顕著に示す政治経済学方法論をわれわれに提示してくれた。すなわち、唯物弁証法という総原則の下で、全体的思惟の過程の中、言い換えれば、理論体系の論理的出発点と論理的帰結をある論理的演繹的枠組という有機的体系の中にあって、研究過程と叙述過程を有機的に結合し、資本制生産様式という特殊な研究対象を主体としつつ、資本制生産様式の発展する歴史的過程に対し論理的分析、本質的抽象とその規則に対する概括を行い、資本の発展運動の内的法則をわれわれに提示してくれたのである。すなわち、それが言わんとすることは、資本制生産の生産力の内的規定が資本の自己増殖の内的法則――資本蓄積の歴史的趨勢における生産の社会性と資本主義の私的所有との矛盾の総合――を解消するということであり、資本制生産様式が共産制生産様式に代替される必然性と、その代替の決定的場が資本の自己増殖にとって残された最後の空間的次元すなわち世界市場であることを示すことである。こうした論理に従い、マルクスは最も豊富な現実的規定を満ちた世界市場での商品を抽象の出発点とし、資本の生産品である商品を構想し、この最も一般的抽象的な商品一般を論理的出発点とし、抽象から具象へ上昇する方法を用い、資本制生産様式の発展とその矛盾の蓄積と演繹とに対し論理的演繹を行い、資本主義経済の規則を徹底的かつ科学的に掲示し、科学的な経済学理論体系を構築したのである。その研究方法と論理的出発点の構築には、唯物弁証法の否定の否定という手法が一貫して用いられている。この方法こそ、中国の特色のある社会主義政治経済学体系、とりわけその論理的出発点の構築にとって、意義ある指導と参考になるだろう。

（本稿は中央大学経済研究所公開研究会で発表、報告したものである。）

参考文献：

[1]骆耕漠.社会主义商品货币问题的争论和分析：总论[M].北京：中国财政出版社，1980:118.

[2]马卫刚.《资本论》始点商品新探[J].曲阜：齐鲁学刊，1984（3）：27-30.

[3]李绪蔼.《资本论》中的唯物主义方法[J].合肥：学术界，1996（3）:5-10.

[4]罗雄飞.论《资本论》的逻辑起点[J].北京：政治经济学评论，2014（1）：178-221.

[5]卫兴华.《资本论》的研究对象、结构和学习意义[J].长春：当代经济研究，2002（11）：26-32.

[6]陈俊明.《资本论》:主体与客体的统一[J].福州 :福建论坛(人文社会科学版),2006(10):32-36.

[7]丁堡骏，王金秋. 《资本论》的逻辑起点及当代意义[J].长春：经济纵横，2015（1）：7-13.

[8]胡培兆.《资本论》研究起点的商品是什么商品[J].福州：福建论坛，1983（01）： 20-25.

[9] 李建平.掌握《资本论》方法，正确理解劳动价值论[J].长春：当代经济研究，2002（1）：8-9.

[10]马克思恩格斯全集[M].第 44 卷.北京：人民出版社，2001.（「資本論」日本語版『全集』第 23 卷）

[11]程恩富.怎样认识《资本论》研究方法和叙述方法的关系[J].复旦大学学报，1984（01）.

[12] 马克思恩格斯全集[M].第 30 卷.北京：人民出版社，1995.（『要綱』1 および２日本語版）

[13]张国平 董瑞华. 马克思主义政治经济学方法论的几个问题[J].江西大学学报（社会科学版），1983（02）.

[14]罗申塔尔.马克思《资本论》中的辩证法问题[M].上海：三联书店，1957:321.

[15]沈佩林.《资本论》中范畴的逻辑顺序和历史顺序问题[J].中国社会科学，1981（02）.

[16]马克思恩格斯全集[M].第 13 卷.北京：人民出版社，1962.

[17]马克思恩格斯全集[M].第 26 卷（下）.北京：人民出版社，1974 .

[18]托尼·史密斯.马克思理论体系之世界市场的地位 [J].政治经济学评论，2005（02）.

[19]马克思恩格斯全集[M].第 46 卷.北京：人民出版社，2003 .

[20] 马克思恩格斯全集[M].第 4 卷.人民出版社，1958.

[21]马克思恩格斯全集[M].第 31 卷.北京：人民出版社，1998:149. （57～8 年草稿、59～61 年草稿、『要綱』第 1 分冊）

[22]黄瑾.马克思经济学理论体系构建方法探析—兼论世界市场成为其理论体系逻辑归宿的原因[J].东南学术，2016（01）.

[23]马克思恩格斯全集[M].第 48 卷.北京 :人民出版社，1985:147.（61－63 年草稿、『草稿集』Ⅵ、第 9 分冊、564～5 頁）